

「話すこと[やり取り・発表]」において、 見通しをもち、主体的に学習に取り組む児童生徒の育成

— 妥当性と信頼性を高めるパフォーマンス評価の工夫 —

外国語教育研究会議

研究員 今野 愛 (川崎市立久地小学校) 菊池 哲哉 (川崎市立菅生小学校)

大窪 洋次郎 (川崎市立宮内中学校) 井上 百代 (川崎市立井田中学校)

指導主事 齋藤 宗則

I 主題設定の理由

学習指導要領では、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、児童生徒が「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」言語活動を通して、伝えたいことを英語で伝えようとするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することが目標とされている。また、言語活動の領域においては、「話すこと」の領域が「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」に分けられ、「聞くこと」「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「読むこと」「書くこと」の5つの領域となり、「4技能5領域」という枠組みが新たに示された。さらに、「英語を用いて何ができるか」という観点から、「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標を具体的に設定することを文部科学省は提言している。その目的は、「生涯学習の観点から、教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度・姿勢を身に付けること」¹と示されている。「CAN-DOリスト」については、小学校の外国語の教科化に伴い、小学校でも導入が推進されている。

学習評価の在り方について、中央教育審議会答申では、「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、(中略)多様な活動に取り組みせるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。」²としている。また、学習評価の充実に関しては、学習指導要領解説総則編の中で、「創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて児童生徒の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること」³が求められている。このことから、「話すこと [やり取り・発表]」の領域において、指導と評価の一体化を意識した会話テストやスピーチテスト等のパフォーマンス評価を授業に取り入れ、「英語を用いて何ができるか」という観点から評価を行うことが必要であり、学年や学校間の接続を意識した取組が重要であると言える。本研究では、「話すこと [やり取り・発表]」のパフォーマンス評価の取組を通して、学習到達目標の達成へ向けて学習の見通しをもち、主体的に学習に取り組む児童生徒の育成を目指し、またパフォーマンス評価の妥当性・信頼性を高めることを実証する必要があると考え、本主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法

研究方法として、児童生徒が学習到達目標を達成するため、教師がパフォーマンス評価のルーブリックをどのように設定し、児童生徒と共有するのかを考えた。パフォーマンステストまでの過程や評価後に、学習の振り返りカードを活用し、児童生徒が自己評価や相互評価をして、教師からもフィードバックを行った。その過程を通して、児童生徒はどのように次の学習の見通しをもって、学習改善をすることができ、教師は授業を改善することができるかについて考えた。

2 研究の手立て

(1) CAN-DOリストに即したパフォーマンス評価

「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標は、各校の児童生徒の学習状況及び地域の実態等に

¹文部科学省「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形で学習到達目標設定のための手引き」平成25年3月 p.4

²中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)平成28年12月21日 p.63

³文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」平成29年 p.94(中学校 p.93)

応じて作成し、それを反映した年間指導計画を立てた。また、作成にあたっては、テストの結果（中学校）やアンケートを活用し、外国語担当者や学年職員（小学校）で話し合い、児童生徒が英語を用いて何ができるようになるかを教師間で確認した。パフォーマンス評価については、その学習到達目標を明確にしたCAN-DOリストに即したルーブリックを作成し、パフォーマンステストを実施することで、児童生徒の達成度を把握した。

（２）ルーブリックに基づく評価

ルーブリックの作成にあたっては、外国語担当者や学年職員（小学校）でCAN-DOリストに即して作成し、その内容について共通理解を図った。ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表」⁴である。学習到達度を示す評価基準を、各観点と段階の尺度からなる表として示し、パフォーマンス課題における児童生徒のパフォーマンスを評価に活用した。また、児童生徒にパフォーマンス課題を提示した際に、児童生徒とルーブリックを共有することで、最終的に何ができるようになるかを教師が意識して指導に臨めるようにした。小学校では、教師が作成したルーブリックをそのまま伝えるのではなく、その内容が児童に伝わりやすい様な形式となるように配慮した。

表1 「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する最終報告 基礎資料」で例示されたルーブリックのイメージ

項目	IV	III	II	I
項目	・・・できる ・・・している	・・・できる ・・・している	・・・できる ・・・している	・・・できていない ・・・していない

記述語

（３）振り返りシートの活用と指導者からの適切なフィードバック

計画的に授業内で振り返りの時間を取り、児童生徒は活動のめあてを再確認し、振り返りシートを記入した。振り返りシートには、振り返る視点として、教師から授業内の活動のねらいを示し、児童生徒が自己評価をする形式とした。振り返りシートをもとに、児童生徒がお互いの活動について交流し、相互評価をする場面も設定した。教師は、児童生徒の学習する姿を見取るだけでなく、振り返りシートを活用して、児童生徒の学習状況を把握し、学習改善につながるような適切なフィードバックを与え、自身の指導改善にも生かした。

（４）パフォーマンス評価の信頼性と妥当性を高めるための工夫

評価の妥当性及び信頼性を高める視点から、外国語科担当者や学年職員（小学校）が全員で、指導計画に基づく指導と評価方法について事前に確認し、「おおむね満足できる」と判断する際の具体的な子どもの姿などを共有した。必要に応じて指導方法を改善するとともに、ルーブリックの共通理解を深め、評価方法を適宜見直すようにした。また、児童生徒とルーブリックを共有し、評価方法を事前に伝え、評価結果についてもフィードバックするとともに児童生徒へ丁寧に説明することとした（説明責任の遂行）。

3 授業の実際

（1）検証授業1 A小学校 5年

○目標到達までの流れ

■単元：NEW HORIZON Elementary Unit5 Where is the post office?

■言語活動：好きな場所について伝えたり、道案内をしたりしてやり取りをする。

■身に付けさせたい資質・能力：自分の知りたい場所をたずねたり、相手を案内するために、お互いの情報や考えなどを伝え合ったりできる/伝え合おうとしている。

■ルーブリック 言語活動の領域「話す（やり取り）」

	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	ALTにお気に入りの場所を伝えるために、簡単な語句や基本的な表現を用いて、道案内をすることができる。ALTの質問に答えることができる。また、自分の気持ちを伝えたり会話に関連することをALTに質問することができる。	相手を見て、はっきりと伝わる声の大きさや発音で話そうとしている。積極的に話をしようとしている。（簡単な語句を使ってALTとやり取りをすることを楽しんでいる。）
B	間違えたりつかえたりすることもあったが、簡単な語句や基本的な表現を用いて、ALTを目的地まで道案内することができる。ALTの質問に概ね答えることができる。	ときおり相手を見て、伝わる声の大きさや発音で話そうとしている。
C	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。

⁴ 文部科学省「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する最終報告 基礎資料」平成29年 p.13

単元の初めに、教師とALTが道案内のやり取りを示し、大まかな学習内容やコミュニケーションの目的・場面・状況を理解させることで、学習の見通しをもたせた。単元の前半は、ゴールで行う言語活動の際に使う基本的な表現、語句に慣れ親しむアウトプット練習を行い、会話への自信をもたせるようにした。児童が道案内の表現に慣れ親しんだ段階で、パフォーマンステストの実施と方法について伝え、ルーブリックを共有した。パフォーマンステストの方法は、児童が作成したオリジナルタウンについて、児童とALTが道案内のやり取りを行い、ALTがその内容に関連した質問をして、児童が答える内容とした。

児童がゴールとなる姿をイメージしやすいように、教師とALTがモデルを数パターン示し、練習のポイントとなる点を伝えた。児童は、オリジナルタウンを作成し、友だちとオリジナルタウンの道案内をする練習をした。練習終了時には、振り返りシートに記入させ、パフォーマンステストへのめあてをもたせるようにした。振り返りシートには、単に道案内をするだけでなく、「ALTの先生に日本の伝統的な場所を伝えたい」や「この町には、〇〇という魅力がある」といった自分の考えや伝えたい内容を広げていく様子が見取れた。振り返りシートに、児童がもつ個々の課題について教師からフィードバックを与え、それを踏まえて、授業では練習するポイントを具体的に指導するように指導改善に努めた。パフォーマンステスト終了後の振り返りシートでは、自分の学びやその変容を自覚する記述が多く見られ、教師からは次の学習へ向けてアドバイスをした。



図1 ALTとのやり取りの様子

○成果と課題

ルーブリックを児童と共有することで、目標到達へ向けたやり取りの具体的なイメージをもってパフォーマンステストに臨めた。また、指導者が振り返りカードの記述を確認し、指導者が適切にフィードバックしていくことで、児童が自身の学びや変容を自覚し、次の学びへと意欲を広げていくことができた。課題としては、やり取りする自分の姿を客観的に把握し、自己評価する難しさにあった。ICTの活用や振り返りシートの視点や質問事項等についてさらに検討する必要がある。

(2) 検証授業2 B小学校 6年

○目標到達までの流れ

■単元：NEW HORIZON Elementary Unit4 Vacation in the World

■言語活動：自分の夏休みの思い出を紹介する。

■身に付けさせたい資質・能力：既習事項を使って、伝えたい内容が相手によく分かるように、聞き手に問いかけをし、相手の反応を見ながら伝えることができる。

■ルーブリック 言語活動の領域「話す（発表）」

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	既習事項や過去を表す語句や表現を正しく用いて、スピーチすることができる。	既習事項を使って、伝えたい内容が相手によく分かるように、聞き手に問いかけをして、相手の反応を見ながら伝えている。	伝えたい内容が聞き手によく分かるように、相手に問いかけをして、相手の反応を見ながら伝えようとしている。
B	I went to ~. I enjoyed ~. I ate ~. I saw ~. It was ~.の過去を表す語句や表現を理解し、スピーチで話すことができる。	夏休みの思い出について、聞き手に伝わるように、伝えようとする内容を整理したうえで、簡単な語句や基本的な表現を用いて、その時の気持ちなどを伝えている。	夏休みの思い出について、聞き手に伝わるように、伝えようとする内容を整理したうえで、簡単な語句や基本的な表現を用いて、その時の気持ちなどを伝えようとしている。
C	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。

単元の最初の時間に、教師の夏休みの過ごし方について紹介し、ビデオ教材や音声教材を使って、おおよその学習内容を理解させ、学習の見通しをもたせた。次に、自分の夏休みの思い出について、行った場所、食べたもの、楽しんだことについて尋ねたり、答えたりするやり取りを友だちと行い、過去を表す表現に慣れてきた頃に、思い出についての感想を付け加えて、相手に伝える活動を行った。

パフォーマンステストに向けては、児童とルーブリックを共有し、教師がスピーチのモデルを示すことで、スピーチを行う上でのポイントを確認した。児童は自分の夏休みの思い出の紹介文を整理して、スピーチの練習をした。練習では、タブレット端末のビデオ機能をつかって、グループで互いのスピーチを撮影し合い、スピーチの流れを確認し合い、目線や投げかけ等、相手意識をもったより良いスピーチになるように児童同士でアドバイスをし合った（相互評価）。練習の後には、振り返りシ

トを記入させ、ビデオを見た教師から、励ますとともに、個々の課題について、学習状況に合わせたフィードバックを与えた。ビデオを見ると、既習表現を十分に理解していない児童が見られたので、児童が既習表現を使う機会を増やし、それらが定着するよう指導を継続した。パフォーマンステストの方法は、まだスピーチに慣れていない児童に配慮し、一緒に練習をしてきたグループごとに前に出てきて、一人ずつ順番にスピーチを行った。児童同士でも相互評価をし合いながら、友だちのスピーチを聞き、終了後にその評価を発表者に渡すようにした。パフォーマンステスト後には児童に評価結果を丁寧に伝え、振り返りシートには、個々の活動の良かった点を価値付けし、さらなる学習改善に向けての助言をした。



図2 タブレット端末を使った活動の様子

○成果と課題

ルーブリックを児童と共有することで、児童は学習の見通しをもち、友だちのスピーチを聞く時の視点をもつことができた。また、タブレット端末のビデオ機能を使用することによって、児童それぞれが自分自身の姿を振り返ることができ、自らの学習改善に有効だった。さらに、学年の担任間で、ルーブリックを共有し、パフォーマンステストの方法、育成を目指す児童の姿の共通理解を図ることで、学年間の妥当性のある学習評価につなげることができた。

児童生徒に伝わる児童用のルーブリックを準備したが、ルーブリックは、児童の負担にならないよう気を付けて、できるだけ具体的に提示できるようにさらに改善する必要がある。

(3) 検証授業3 A中学校 2年

○目標到達までの流れ

■単元：TOTAL ENGLISH 2 Lesson4 Hiro in the U.K. / Lesson5 Career Experience

■言語活動：日常的な話題について英語でやり取りをする。

■身に付けさせたい資質・能力：日常的な話題について読んだことを基に、自分の考えやその理由を伝え合うことができる。

■ルーブリック 言語活動の領域「話す（やり取り）」 評価観点：思考・判断・表現

	ア：適切な質問	イ：情報を加えて応答	ウ：相づち
A	相手の発話に合った質問を複数回行っている。	相手からの質問に対して、適切に、十分な情報量を加えて応答している。	相手の発話に対して、2種類以上の相づちを打っている。
B	相手の発話に合った質問を1回は行っている。	相手からの質問に情報を加えて応答している（プラスワンがない応答が多い）。	相手の発話に対して1回以上相づちを打っている。
C	相手の発話に合った質問ではない。または質問していない。	相手からの質問に答えない。または適切に応答できていない。	相づちを打っていない。

両単元ともに、教科書本文の内容を聞き、理解することで学習内容の見通しをもたせた。教科書の内容につながる会話活動のトピック（Where do you want to visit during the next winter vacation?/ What do you want to be in the future?等）を設定し、生徒は帯活動として毎授業で会話活動を行った。教師は、会話活動の前、活動中には適宜モデルを示し、活動のポイントとなる点を伝えた。

パフォーマンステストについては、実施と方法について生徒に伝え、ルーブリックを共有し、ゴールまでの見通しをもたせた。マッピングを用いて生徒が自分の考えを整理したり、自分の考えを広げたりすることができるようにした。ルーブリックの内容に照らして、生徒同士が相互評価をする時間を設定し、振り返りシートへ自己評価をさせた。その振り返りシートへ教師からフィードバックを与えることで、生徒は目標到達までの自分の位置を確認することができ、改めてゴールまでの見通しをもち、主体的に練習に取り組むことができた。教師は活動の中で生徒の改善状況を見取りながら、助言や支援を継続した。パフォーマンステストの方法は、2つの単元のそれぞれの帯活動で行ってきたトピックが書かれたカードを生徒が引き、教師と1分間会話をした。テスト後には生徒一人一人に練習での工夫点を評価するとともにテストの結果を伝えた。また、振り返りシートに記述されていた「相手が言ったことに対してすぐに反応することが難しかった」「普段の練習から、しっかりと会話の意味を理解して話す練習をすればよかった」といった個々の課題についても、次の学習に向けて具体的にアドバイスをした。



図3 会話活動で助言する様子

○成果と課題

練習段階からルーブリックを生徒と共有し、教師からのフィードバックや生徒同士の相互評価の場面で生かすことができた。また、帯活動として継続して練習する場面を設け、ねらいに即して適切なフィードバックを適切なタイミングで行うことが生徒の主体的な学習につながった。さらに、複数教

師で同一学年を担当していたので、パフォーマンステスト前に、教師間で事前にルーブリックについて打ち合わせをした。評価方法やモデルをもとに具体的な子どもの姿を確認しておくことが評価の妥当性につながった。

課題は、帯活動で用いたトピックでテストを行ったため、使用する言語材料を生徒はあらかじめ知っている状況のテストになってしまったことである。また、教師による評価の妥当性を向上させるために、パフォーマンステストの頻度を増やす必要性を感じた。簡便な評価の方法を工夫して、その頻度も研究を進める必要がある。

(4)検証授業4 B中学校 1年

○目標到達までの流れ

■単元：Total English 1 Lesson 4 Nice to Meet You. / Lesson 5 Ms. Allen's Family

■言語活動：他己紹介をするプレゼンテーション

■身に付けさせたい資質・能力：既習事項を活用し、自分や自分の周りの人について、考えや気持ちを整理し、簡単な語句や文を用いて、まとまりのある内容を人前で発表することができる。

■ルーブリック 言語活動の領域「話す（発表）」

条件1	クラスメイトが知らなさそうな情報を加えて話している。
条件2	質問をするなど話を振って、聞き手を意識した参画型のプレゼンテーションをしている。
条件3	アイコンタクトや表情など聞き手が引き込まれる工夫を入れている。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	主語に合わせて、動詞の形を適切に変化させるなど、誤りのない正しい英文で話すことができる。	3つの条件を満たしてプレゼンテーションをしている。	3つの条件を満たしてプレゼンテーションをしようとしている。
B	主語に合わせた動詞の変化など、誤りが一部あるが、コミュニケーションに支障のない程度の英文を用いて話すことができる。	2つの条件を満たしてプレゼンテーションをしている。	2つの条件を満たして伝えようとしている。
C	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。	Bを満たしていない。

最初に教師のプレゼンテーションを2パターン例示することで、生徒が目指す姿を頭にイメージした上で、日々の言語活動に取り組めるようにした。教科書の内容を通して、他己紹介の表現を学び、登場人物になりきって、他己紹介をする練習をした。マッピングを用いて、読んだ内容を整理し、伝える順番を考えながら教科書の登場人物について伝えるリテリング活動を重ねた。

パフォーマンステストへ向けては、生徒とルーブリックの共有をし、ゴールの見通しをもって学習に取り組めるようにした。発表する人物について、思考ツールを活用し、情報を集め（マンダラート）、集めた情報を整理した（マッピング）。マンダラートやマッピングを用いて発表の練習をするとともに、写真やスライドといった視覚資料を準備した。中間発表を実施し、その時点での自分の姿を振り返り、他者の発表からも学ぶ機会を設定した。互いにアドバイスをし合い、教師からもそれぞれの課題についてフィードバックを与えた。他者から学んだことやフィードバックをもとに、再度内容の練り直しをして、練習に取り組んだ。教師は生徒のつまづきに応じて助言や支援を行った。パフォーマンステストの方法としては、書いたことを暗記するのではなく、自分の伝えたいことをマッピングなどで整理し、まとまりのある内容で話す活動とした。クラスを2グループに分け、2日間で発表した。パフォーマンステスト後、生徒は今回の活動について振り返りシートに記入し、教師からは個々の学習改善状況について伝えた。全体では生徒の良かったパフォーマンスについて共有し、今後の学習につなげた。



図4 プレゼンテーションの様子

○成果と課題

ゴールの活動を単元の初めに示すことで、生徒は授業での言語活動に主体的に取り組むことができた。また、マッピングなどの思考ツールをうまく活用することで、考えを整理し課題により良く取り組もうとする態度につながった。加えて、振り返りで個々の成果と課題を言語化することで、発表して終わり（やりっぱなし）にせず、自己調整し、次の学びにつなげることができた。

課題としては、パフォーマンステストに向けて、小さな言語活動を本番を意識して計画的に設定する必要があった。また、中間発表の機会を設けたものの、ペアや小グループでの練習に終わってしまった。人前で発表することを意識した練習ができず、アイコンタクトなどが中途半端に終わってしまった。3つの条件をうまく使っている生徒の「モデル」を全体で共有し、互恵的な学びを促す必要があった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、「話すこと[やり取り・発表]」の領域におけるパフォーマンス評価を通して、児童生徒が学習目標到達へ向けて、どのように学習の見通しをもって、主体的に学習に取り組むことができるか、また妥当性・信頼性のあるパフォーマンス評価の在り方について探った。CAN-DOリストに即したルーブリックを共有し、パフォーマンス評価を行ったことで、児童生徒にとって目標が明確となり、見通しをもって活動に参加する児童生徒の姿が見られた。また、振り返りカードから児童生徒の学習状況を把握し、教師が適切なフィードバックを与える学習支援をしたことは、児童生徒が課題をもち、自己調整につなげながら、よりよく学習に取り組もうとする姿にもつながった。振り返りシートでは、教師からのフィードバックをもとに、学習の見通しをもって、主体的に学ぼうとする記述を多く確認することができた。

さらに、学年の教師同士が、指導計画に基づく指導と評価方法を事前に確認し、パフォーマンス評価に関する共通理解を図ることは、学習評価の妥当性につながり、児童生徒とのルーブリックを共有し、評価結果についてフィードバックとともに丁寧に説明することで、学習評価の信頼性を高めることができた。研究員が所属する教師からは「この取組を他教科でも今後続けていこう（小学校）」「来年度に向けて、今年度中に目標、指導、評価について見直すための時間をもとう（中学校）」という声が聞かれた。

加えて、小学校、中学校の両実践において、本研究におけるパフォーマンス評価の指導や評価方法が、共通して子どもたちの主体的な学びにつながった。今後、中学校区内での小学校と中学校の教師が、互いの授業を参観し、目標・指導・評価について意見交換することは、同じ子どもたちの資質・能力を育成し、学びの連続性を深める意味でも重要なことである。

2 今後の課題

単元で身につけさせたい力を考えてパフォーマンス課題を設定することはできたが、単元の言語材料を越えて「英語を用いて何ができるか」を問う課題を設定するという意味では、課題が残った。今回のパフォーマンステストは、限られた言語材料を用いるパフォーマンス課題となっていて、児童生徒が既習の言語材料等を用いた即興的な対話を試す場面があまり見られなかった。小学校段階では「即興で」話すことは目標とされていないが、中学校段階を考えると即興で話すように励ますなど工夫をすることができる。今後、児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の評価の妥当性を高めるため、パフォーマンス課題を工夫し、児童生徒の達成状況に応じて、評価規準とルーブリックを改善していく必要がある。

また、学年の指導者同士のCAN-DOリストの活用やパフォーマンス評価についての共通理解を学習評価の妥当性に結びつけることができたが、学校内や教科部会内での共通理解までには至らなかった。より妥当性のある学習評価のために、学校内、また教科部会において、各学年段階の年間指導計画を踏まえ、児童生徒の実態に合ったパフォーマンス評価を位置付け、組織的に取組を継続していくことで、教員間の指導と評価に関する共通理解を深め、指導の改善・充実につなげることができる。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なお助言をいただいた先生方、研究をご支援いただいた研究員所属の校長先生をはじめ、教職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

【参考文献】

- ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版 2014年
文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』2017年
根岸雅史『テストが導く英語教育改革』三省堂 2017年